

ソーシャルワーク実践とパーソナルリカバリー

ー生の過程と意味づけの生成ー

○ 東北福祉大学 総合福祉学部 社会福祉学科 黒田 文 (002095)

キーワード：パーソナルリカバリー、ソーシャルワーク、生の過程

1. 研究目的

リカバリー指向のサービスを提供することは、英語圏の精神保健福祉領域の政策理念の主流となっている (Australian Health Ministers, 2003; Department of Health in England, 2001; Mental Health Commission in Ireland, 2005; Mental Health Commission in New Zealand, 1998; New Freedom Commission on Mental Health in the US, 2005)。一方、Slade ら(2008)によれば、政策に登場するリカバリーは、生物医学的モデルを基盤にしたクリニカルリカバリー (clinical recovery: 臨床的リカバリー) であり、パーソナルリカバリー (personal recovery: 個別主観的リカバリー¹) と距離があると指摘する。パーソナルリカバリーの概念は、新しく意味づけされたリカバリーと解釈されて単に病気が治ること、元の状態に戻る／回復することではなく、疾病や症状の有無にかかわらず自分の人生、価値を取り戻すことを目的にして、精神障がい者の手記活動から広がっている (Anthony 1993; Deegan 1996; Ramon et.al 2009; Slade 2009)。本研究では、パーソナルリカバリーの概念を中心としたリカバリー指向のパラダイムシフトに対してソーシャルワークがどのようにコミットメントできるかを検討したい。

2. 研究の視点および方法

パーソナルリカバリーは従来の生物医学モデルと異なる基軸の提示になるが、この考え方を理解し、実践へ内包することがソーシャルワークにとってどのような意味をもたらすかを考察するのが本研究の視点である。研究方法は文献研究である。

3. 倫理的配慮

研究の遂行に際して日本社会福祉学会研究倫理規程および研究倫理規程にもとづく研究ガイドラインを遵守している。

4. 研究結果

リカバリーは英語圏各国の政策に反映されているが、その定義には非互換的な意味が含まれているのが現実である (Slade 2008)。リカバリーの定義は、症状の低減や機能向上を目指して疾病から寛解 (recovery from) することが基軸になるクリニカルリカバリーと本人が自分の人生に価値や意味を見出している (being in recovery) を基軸にするパーソナルリカバリーとに大別される。パーソナルリカバリーは特に疾病が機能上の制限を生じさ

¹ 日本語文献では、個人的リカバリー、主観的リカバリーなどの訳出がある。リカバリーが個別化されており、主観的に意味づけされるという側面をふまえ、個別主観的リカバリーと訳したが、定訳がないことから本稿では全体を通してパーソナルリカバリーと標記する。

せていたとしても、生き方に満足や希望が感じられているならリカバリーと定義できるという解釈を採用する。上記の二つのリカバリー概念はそもそも源流が異なるため、両者の定義が異なるのは当然だが、混乱を招いている側面もある。Barber (2012)は上記に加えて第3のリカバリーとして病状を悪化させない症状マネジメント(illness management)²の視点を提供している。パーソナルリカバリーは、精神的困難を抱える者が生きる上で新たな意味や目的を見出すことができているかを基軸にしているため、各々の特徴を反映した個別性が高くなる。それ故、アカデミックには評価として受け入れ難く捉えられるが(Walsh & Boyle 2009)、他方でパーソナルリカバリーは全く主観的なものではなく、陽性症状と社会機能の媒介要因になることも報告されている(Kukla, Lysaker & Roe 2014; Jorgensen et al., 2015)。

ソーシャルワーカーは支援において利用者の生の過程へ入り込む。その際、ソーシャルワーカーは、生の過程は当事者のものであり必ずしもその基本的な在り方を変えなくてもよいと認識して生の過程を尊重することを根本原則の一つとしてきた(Schwartz 1971)。自らの経験を当事者が再構築する過程を尊重して関与するならば、ソーシャルワーカーは生の過程における(よい意味での)通りすがりの存在である。これは、パーソナルリカバリーにおいてサービス利用者自身が人生の意味づけをすることを重視する考え方と符合する。ここにソーシャルワーカーが精神障がい者の生の過程へ関わり、パーソナルリカバリーを促進していくことの接点が見いだせると考える。

5. 考察

サービス利用者が自らの認識にもとづいてリカバリーを捉え直す指向性があるゆえにパーソナルリカバリーは機能すると考えられる。パーソナルリカバリーに呼応するソーシャルワーク実践は、サービス利用者の生の過程を丹念にひろい、経験への意味づけを共同で行う作業となるだろう。意味づけされた経験が個人的内容でも、その内容が他者と共有される機会構築が必要であると考え。パーソナルリカバリーを成り立たせる生の過程・意味の生成にソーシャルワークがコミットすることで、パーソナルリカバリーの考え方がクリニカルリカバリーを補完する内容としてリカバリー指向のシステムへ反映される方向性を後押しすると考える。

主要参考文献 (抜粋)

Deegan, P. (1996) Recovery as a journey of the heart. *Psychiatric Rehabilitation Journal*, 19(3), 91-97.

Slade, M. (2009) *Personal recovery and mental illness*. Cambridge University Press.

【謝辞】本研究は JSPS 科研費 JP21KO1996 の助成を受けたものです。

² Disease management (疾病／疾患マネジメント) の用語もあるため、illness management は症状マネジメントと訳した。